

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.37 (2018年3月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西潤子
東洋音楽学会 HP： <http://tog.a.la9.jp>

【第70回定例研究会】のご案内

日時：2018年6月9日(土) 14:00~16:00
場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス
奏楽堂講義室(奏楽堂ホール2階) 予定
参加費：会員・非会員ともに無料(予約不要)

内容：研究発表1 遠藤美奈
「戦前の沖縄における本土式盆踊りの諸相
～沖縄本島および八重山諸島について～」

研究発表2 比嘉悦子
「沖縄のわらべ歌・その継承について」

【第69回定例研究会記録】

日時：2018年2月18日(日) 14:00~16:00
場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス
奏楽堂講義室(奏楽堂ホール2階)

研究発表1 又吉恭平

「沖縄県における獅子舞の歴史と伝承
ー浦添市の獅子舞を中心にー」

■発表要旨

本発表は沖縄の獅子舞について、その歴史と伝承を明らかにすることを目的とする。獅子舞は日本のみならず、広くアジアにも伝わる芸能である。その

中から発表者は沖縄の獅子舞を対象として研究を行った。これまで沖縄の獅子舞を対象とした研究では、獅子舞について、いくつかの事例を挙げ、それらを総合的に研究したものが多く、特定の地域における伝承について取り扱った研究は殆ど無かったと言える。そこで本研究では浦添市の獅子舞を対象とし、過去の記録と、フィールドワークによって得られた情報を基に、獅子舞が伝承されていく上での変化について考察を行った。

沖縄の獅子舞は現在183の地域で伝承されているとされ、村の守り神としての役割を持っている。口承では約500年前に汀志良次村(現:那覇市首里汀良町)で獅子舞が行われたのが始まりと伝えられており、文献では1719年に中国から来琉した、冊封副使、徐葆光による『中山伝信録』(1721)に最初の記録がある。

浦添市の獅子舞は、内間、勢理客、仲西の三地域に伝承されており、これら地域に共通する祭事に「十五夜祭」(旧暦8月15日開催)がある。十五夜祭について、ここでは戦前(1945年以前)の記録と、現在の状況(2014年)とを比較し、祭りが過去から現在に至るまで、どのような変化を遂げてきたかを明らかにした。すると、三地域とも戦前の十五夜祭は規模が大きく、演目も数多く行われていた。しかし現在では、その規模は縮小され、演目も沖縄戦を境に途絶えてしまったものが数多くあることがわかった。しかし、獅子舞については関連する神事も含め現在まで伝承が継続されてきたことが明らかとなった。

さらに浦添市の獅子舞における戦後から現在に至るまでの動向についての考察を行った。三地域とも沖縄戦により獅子を失うこととなったが、戦後、勢理客の比嘉次郎氏によって獅子が製作され、獅子舞は復活した。またその後、勢理客の獅子舞が1973年に「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」への選択、そして三地域すべてが1981年に「浦添市指定民俗無形文化財」に指定されている。また文化財の選択や指定をきっかけとして、これまで地域の中で演じられていた獅子舞は上演の場を市外や県外、海外まで拡大することとなった。浦添市の獅子舞の関係者を対象とした調査では、いずれも十五夜祭で演じられる獅子舞が最も重要であるという認識に変わりはないが、外地での演舞も獅子舞を伝承する上では今や欠かせないものとなっていることが明らかとなった。



(又吉恭平氏の発表)

■傍聴記

本発表は又吉氏が2016年3月に沖縄県立芸術大学大学院に提出した修士論文に基づくもので、沖縄各地で盛んに行われている獅子舞に関する歴史と伝承、とりわけ浦添市で継承されている3地域(勢理客・仲西・内間)に注目しながら、その実態を明らかにするというものだった。発表では、戦前戦後を通じてみられる実践形態を時代と地域別に比較検討しながら進められていった。

まず、先行研究をふりかえり、沖縄の獅子舞が本土のそれとは異なる「二人立ち」で舞う特徴を持ち、北は伊平屋島から南は与那国島まで183ヶ所まで演じられ広く分布している沖縄を代表した芸能であることが紹介された。歴史的には、獅子舞に関する最古の記録は1719年御冠船であるとみられ、その

後も来琉する冊封使らの歓待の場での上演記録があり、組踊や琉球舞踊などと並び必要不可欠な演目ではないかたのかとの指摘があった。また、その演舞内容については、琉球王朝の解体後の芝居舞台やムラの豊年祭等の記録を遡っても、ほぼ現状と変わらないのではと推察している。

続いて、浦添市の獅子舞の具体的な比較が行われた。発表者が仲西の担い手ということもあって、同日開催の2地域は複数人による記録等で補いながら、隣接地域の芸能を現在の担い手が比較検討を試みている。それぞれの獅子舞の由来は隣接する地域にありながら別にあつて、十五夜で演じられるほかは関連性があまりないようだ。戦前は「獅子舞」「舞踊」「狂言」を柱にして、とくに若者を中心しながら、芸能ごとに組織(シンカ・ニンジュ)を作り、競い合いの原理のなかで継承されてきた様子が紹介された。現在では、十五夜のメインは「獅子舞」にあるようで、獅子に対しての御願は欠かさないが、「後遊び」は行っておらず、「舞踊」や「狂言」のなかには演じていない演目が多くあると詳細について分析した。さらに、こんにちまでの継承のなかで「獅子舞」を取りまく環境についても検討を加えた。戦後の「獅子舞」を復興するなかで、特定の製作者によって3地域の獅子頭が作製されてきたことや、勢理客の「獅子舞」の国の重要無形文化財(「記録措置などを講ずべき無形文化財」)等にみられる外的な評価と内的な意識的価値の相関などについて言及された。最後に、獅子舞は「神獅子」として祭事以外の場での上演が限定されてきたが、こんにちでは新たに獅子舞を製作するなどして、対外的な場を通じての伝承機会の創出の場が作られていることについて取り上げた。本来の文脈からの切離しによる獅子舞の演舞は、こんにちにおいて伝承に欠かせない一部となっていると位置づけた。

質疑応答では、沖縄諸島各地の豊年祭や村踊り等でみられる演目内容ごとの継承形態や、二才衆(ニーセージュウ)といった若者による担い手組織といった他の芸能との類似点が示されたうえで、現状における次世代の継承状況と実際の担い手の年齢層が問いかけられた。継承は常に課題となっている話題と前置きし、子どもたちによる「子ども獅子」がどの地域も取り入れて盛んだが、「神獅子」を担え

る年齢層への世代の移行には、あまり上手くできていない現状が説明された。具体的には、舞い手は40歳から50歳、時には60歳が担う場合があるといい、新しい取り組みのなかにあっても継承のサイクルをどのように作ることができるのか、その難しさが示された。

(報告：遠藤美奈)

研究発表2 小川恵祐

「『アジア伝統芸能交流』プロジェクトをめぐる 舞台化の議論と民族音楽学者」

■発表要旨

本発表は「アジア伝統芸能の交流 (ATPA)」プロジェクトの全貌を明らかにするものである。そして、伝統音楽・芸能の舞台化をめぐる、とりわけ民族音楽学者の間でどのように議論されたのか調査研究した結果を報告することを目的とする。

ATPAは、小泉文夫や徳丸吉彦ら民族音楽学者が企画構想し、1970～1980年代にかけて実施されたプロジェクトである。国際交流基金が主催し、日本とアジアあるいはアジアどうしの「つながり」の構築と相互理解が目的とされた。事業内容は(1)現地調査、(2)学術討議、(3)一般公演および関連イベント、(4)報告書および音源・映像記録作成の4つからなる。全5回にわたって、アジアの伝統音楽・芸能(日本のものを含む)40種類を日本に招へいし、国立劇場や市民会館など全国30カ所の異なる会場で、累計76回もの公演を行った。

このように大規模かつ長期のプロジェクトであったため、現在では多数の資料が散逸しているが、当時の新聞記事や『音楽芸術』などの雑誌に寄稿された批評文から、ATPAをめぐる起こった議論の一端を知ることができる。国際交流基金スタッフは「制作者はいつも加害者である」と言及し、観劇したある研究者は「舞台で見たのが残念だった」と述べた。プロジェクトを牽引した小泉までもが「西洋近代に興った音楽会のように、何か冷たいものになりはしないか」と、伝統音楽・芸能の舞台化を危惧している。この背景には、その音楽芸能の現地におけるコンテキストが、日本の劇場という文脈におい

ては再現されないジレンマがあったのではないかと推察される。

舞台化に対して否定的、あるいは自省的な見解があった一方で、徳丸は「伝統を新しい文脈に置くという点で、一つの時代を画した」と肯定的であった。八雲琴奏者の山本震琴が、ATPAを契機として、消滅の危機に瀕していた八雲琴の全150曲を記録するため『八雲琴音符』を大成させたことや、ボルネオ島のサペー奏者がクアラルンプールといった都市部にも活動拠点を移行していることに触れ、積極的評価を試みている。同じく監修者の山口修は、その音楽芸能を理解するには、「音楽家本人たちの口からか、現地で調査したことのある民族音楽学者か人類学者からの説明を待てばよい」と述べている。

以上のように、ATPAをめぐる舞台化にあたっては、現地の表演の再現が挑戦されたからこそ、民族音楽学者を筆頭に間コンテクスト性へ強烈な意識があったのだと考えられる。くわえて、研究者の介入が文化の担い手に与える影響をどのように評価するかという民族音楽学の応用音楽学的な議論が、ATPAを通して当時すでに起こっていたことも示した。



(小川恵祐氏の発表)

■傍聴記

本発表は、小川氏が2017年3月に沖縄県立芸術大学大学院に提出した修士論文「『アジア伝統芸能の交流 (ATPA)』プロジェクトの研究-その日本での劇場公演制作に関わった人々の役割の互換、創造性、挑戦に注目して-」に基づいたもので、その中からとくに、伝統芸能公演を「つくる」議論について抜粋した内容であった。

「アジア伝統芸能の交流 Asian Traditional Performing Arts (略称: ATPA、アトパ)」は、1970～80年代にかけて小泉文夫をはじめとする研究者が企画構想し牽引したプロジェクトで、日本を含めたアジア各地でのフィールド調査、実演家と研究者を交えた研究会やシンポジウムの開催、芸能公演や展覧会の開催、報告書や視聴資料の作成、などを行った。発表者は、事業の開催から40年余経過し分散してしまった ATPA に関する様々な資料を収集してプロジェクトの全貌を明らかにしたうえで、アジアの伝統芸能を日本で上演するにあたり民族音楽学者の間でどのような議論が起こったのかを分析、考察することを研究目的とした。

ATPA の公演は、1976年4月の第1回シリーズを皮切りに、ほぼ3年毎の開催で、通算計76回30ヶ所40公演行われた。公演シリーズのテーマごとに上演団体の国や地域、芸能が様々であったほか、公演の監修(アドバイザー)や演出を担った研究者や舞台専門家も異なった。また、演出構成にも工夫が施されており、例えば、上演中にスクリーンに歌詞や解説が投影されたり、小川氏が発表中に示した第二回公演の際の上演風景写真では、舞台はせり出し舞台で客席と距離が近く、またすべての出演者が舞台上に据え置かれた状態で公演が進行し、異なる地域の芸能を互いに見合う構成だったという。ATPA の企画は、各地の伝統芸能を舞台上で現地のように再現しようとする試みで、とくに日本との関連を重視した内容であった。アジアの伝統芸能が交流し、「つながり」が創出される、という民族音楽学者による肯定的な評価がある一方、劇場舞台での上演という脈略変換での「現地の再現」の不可能性が問われた。また、交流という名義の元に行われたとしても、文化を比較することが洗練とプリミティブの差を生み出しかねないとする反省や批判の声が挙がるなど、ATPA すなわちアジアの伝統芸能の交流とその舞台化は、様々な議論をよんだ。

質疑応答では、ATPA による出演者の選定方法や、企画が5回で終わった理由、また第4回(1984年)と第5回(1987年)の公演から民族音楽学者が企画に関わっていない理由などの質問があった。出演者の選定方法として、まず研究者および関係者が調査希望の地域と芸能を検討し、それを各国大使館に

相談して該当団体を紹介してもらおう、という一つの方法が紹介された。企画が全5回で終わった理由としては、ATPA が当初からプロジェクトの期間を15年と定めていたことに加え、80年代に入ってから民間でもワールドミュージックブームが起り、アジアの伝統芸能の紹介に国家予算を投じることの意義が弱まった可能性が示された。それにも関連するように思えるが、企画自体の主たる目的が研究ではなくなり、一般の人々に見せることを重視するようになったことが、研究者が公演に名前を連ねなくなったことの原因ではないかと説明があった。

なお、発表者は今後の課題として、当時関わった実演家への聞き取り調査の必要性をあげている。また質疑応答でも、公演を観た側の反応についても質問があった。世界がまだ現在のように開放的でも密接的でもなかった70～80年代、各地から集まった出演者や観覧者が異文化に接近する機会として ATPA が果たした役目と与えた影響は、良し悪しを問わず決して小さくない。民族/民俗芸能の上演の場の脈略変換が引き起こす様々な問題や議論は、ATPA に限らずこれからも続いていくだろう。過去の公演を取り巻く様々な事象に対する発表者の継続的な研究から導き出されるものが、今後も続く同様の議論になんらかの示唆を与えてくれることを期待したい。

(報告:長嶺亮子)

東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.37 編集委員
岡田恵美、三島わかな、古謝麻耶子
次号 No.38 は 2018 年 7 月に発行予定